

## 平成28年度第2回障害者支援センター運営委員会議事録

■開催日：平成28年9月26日（月）午後2時～4時

■場所：横浜市健康福祉総合センター9階 901・902会議室

■出席者：委員総数16名中14名出席

平井委員、大塚委員、松島委員、渋谷委員、永田委員、八島委員、長谷山委員、下山委員、谷口(実)委員、早坂委員、室津委員、谷口(政)委員、増田委員、茨木委員  
(オブザーバー) 横浜市2名(君和田障害支援課長、佐藤福祉保健課担当係長)

### ■議事

(森センター長)

皆さんご多用のところありがとうございます。本来であれば12月に開催するところではあります。本日はどうしても皆さんのご意見を伺いたいということで開催した。今回の議論だけで終わりというわけではないので、ぜひともいろいろな意見を出していただきたい。それから、新委員の川島志保弁護士だが、本日は、弁護士に5年に1回義務つけられている倫理研修があり、本日も欠席となっていることを付け加えさせていただき、次回にはぜひとも出席いただくようにしたい。

(谷口委員長)

それでは早速はじめさせていただく。

(小野事業推進課長)

オブザーバーの紹介の後、定足数確認。16名の委員総数に対し14名出席。委員会の成立を告げる。

## 1 議題

### (1) 障害者支援センターの今後のあり方について

(谷口委員長)

議題1は、今までいろいろ課題が出されてきたが、森センター長が、過去のことを整理され、その課題を整理した中でのお話をいただき、皆様からご意見をいただきたいと思っている。

議題2は、津久井やまゆり園の事件について、ご意見をいただきたい。社会福祉をめぐる状況も、容易ならざることになってきている。私が最近要請を受けるのは、人材確保がどうしてもできない、この問題をどうやって克服したらいいのかということ。特別養護老人ホームでは新設で開所しても人手がなく、ベッドを空けたままというようなことが現実に起きてきている。人材確保ができていない上に、永年介護保険料を払ってきて、サービスを受けられる時点になって、例えば、特別養護老人ホームに入ろうと思っても何十万人も待っている状況。既に保険原理は破綻している。その保険原理の中に障害者の福祉も合体させていくということになったら、再び大きな課題が生ずると感じる。

(森センター長)

資料1に基づき説明。

まず、5ページ目の一番初めをご覧いただきたい。「平成28年度第1回運営委員会での森発言」ですが、私は前回こういう話をした。「これまで運営委員会で、さまざまなご意見をいただいたが、そのご議論が必ずしも具体化の方向に実を結んでいないという状況があり、積み残しになっていることもある。支援センターの役割の見直しも考えなければいけない時期であると思っており、この間のご議論について一定のまとめに向けてご協議をお願いしたい。」と、その上で、この間の議論を少しまとめたものとそれ以下のもの。私が支援センター長に就任したのは、24年6月だが、それ以前にもう議論は始められていた。平成16年に社会福祉協議会と一体化した後、19年8月6日に「障害者支援センターの今後の展開について」という、取りまとめが出され、「お元気ですか」にも掲載した。私は、歴史的な経過も含めて取りまとめを一回やってみたらどうだ、という谷口委員長のお話もあり、議事録などを全部読み返してみた。19年8月6日の中で、一定の方向性がまとめられ、それを受けて翌年、平成20年12月に、社協の中に社協障害児・者支援事業展開検討会が開かれ、支援センターはこれからこういう機能を社協の中で果たしていこう、というような方向性が出されていたようである。議論しまとめている。

平成20年の検討会の後、東日本大震災や、沼尾センター長の逝去というような、大きな出来事があり、具体的な検討ができていない部分もあり、その間、大きな方向づけがされないまま推移していたというように感じる。私が24年6月にセンター長になって、特に平成26年にかなり熱い議論がされていた。これらの議論を踏まえつつ、今後これから支援センターはどうあるべきか。つまり組織としてどうあるべきか、活動としてどんな方向で動いていったらいいのかと、こういう議論の素材として、皆さんにご提供させていただいた。

資料は、私が平成24年6月に支援センター長になってからの、運営委員会での主な論点というふうにとまとめさせていただいた。一つは、支援センターに特定の課題についての検討を求められたもの。つまり、支援センターはこういうふうな活動をしていったらどうだろうというのが一つのくくり。もう一つのくくりというのは、支援センターの組織のあり方・役割について求められたもの。専門職化を進めてほしいとか、こういういわゆる支援センター自体への皆さんの希望とかそういうもので寄せられたものがある。

資料1に基づき引き続き説明。

今後皆さんに検討していただきたいのは、例えば、この課題を取り組もうとか、支援センターはこういう組織であるというのをもう少し具体的にご検討いただきたい。そのため、12月か1月ぐらいに、再度委員会を開催し、論点をさらに整理したような中身で議論を深め、支援センターの方向づけをしていただけたらと思う。

(谷口委員長)

少し自由な意見交換をしていただければと思う。

(渋谷委員)

発言は変わらないが、当事者で、障害者の状況はこれからも厳しくなっていくだろうと思われるので、当事者運動の必要性というのはますます重要になってくる。と我々の力不足もあるが新しい担い手が育ってこないという状況を何とか打開をしなければいけない。そのためには何か新しい仕組みをつくらなければならないと思っている。

(松島委員)

当事者自身の行動は大事だが、その当事者が年々減っていくということが一番大きな課題。神奈川の脳性マヒ者協会も年々会員が減っている。そこを何とか打開して、もっと増やして障害者自身ももっと活動できる状態にしたいと思っているが、減る一方で、どうにか受け皿として障害者支援センターと、もっとしっかり連携していかなければと思っている。

(渋谷委員)

津久井やまゆり園の事件は、多くの人々が持っている意識が、たまたま極端な形であらわれたということだと思っている。ああいうあらわれ方をしたということは、社会の新しい扉、新しい時代が一つ開けたんじゃないかなというふうに思っている。そんな中を僕たちや僕たちの後輩はこれから生きていくのだと思っている。そういう意味でも当事者の運動なり活動は重要である。

(八島委員)

横浜やまびこの里ではグループホームを15カ所ぐらい運営しているが、一つはやはり、利用者や家族が高齢化しているということ。そういう中で、無理に頑張って親が支えようとはしていないが、親の病気など、本人を本当に支えられないような状況になった場合、それをサポートするのは法人というのが現状である。そうせざるを得ない。そういう意味で、親が高齢化した場合、本人が高齢化した場合の備えというものが大変不十分であるのが偽らざる現状だと思う。例えばグループホームならグループホームの制度そのものだけで、本人たちをサポートできているわけではない。現実的には親が支えながら生活をしているときに、突然親が亡くなってしまうと、それを法人で全部サポートできるかということ、それもかなりきつい。要は、本人たちがどんな生活をしているのかという原点をきちんと把握しておかないと、制度の方から物を考えてしまうとわかった気になってしまう。やはり本人たちの生活が一番ベースにあり、それは支えるための制度だが、本人たちの生活を支えている部分というもの、それが変化しつつあるということ、将来はさらに大きく変化するだろうというふうな視点をどこかに持っておく必要がある。それは個々によるのではなくて、やっぱりこういう場で議論をすべきであると思うし、そういうことを担えるのは、この組織じゃないかと思っている。

(森センター長)

支援センターには運営委員会という組織があり、そこで支援センターの方向性を考えていこうというような役割がある。要するに障害者の支援に関することは、ここで方向性を議論する仕組みである以上、ここで何らかの方向性・意見を持って、我々も仕事に携わっていきたいと思っている。方向性

と言ったって、簡単に出ることではないが、今の時代的背景からすると、こういうものを支援センターとしては追い求めていく必要があるというようなことを、いただきたい。例えば専門職であってほしいというふうの一つの希望が語られたときに、その専門性とは何かとかの議論もあるかもしれない。市社協の理事だから、全理事の中で、支援センターとしてはこういう意向を持って臨みたいという話ができる。ですから私が、こういう方向で支援センターの方向づけを考えているというふうに言えるようなものを、皆さんから私にアドバイスをいただけたら本当にありがたいと思っている。

(早坂委員)

私が今一番感じているのは、当事者や家族の声が出にくい状況になっているような気がする。余りにもサービスも増え制度も変わり、話の流れが新しい制度についての説明会のような話の方がすごく多くなったような気がする。でも、基本は当事者や家族の思いがないと、新しい制度が増えたとしても、当事者の方たちが使いにくいものであったらいけない。当事者の声を大事にしていきたいと思う。先ほどのお話があったが、一緒に活動をしている視覚障害の方とか聴覚障害の方たちの団体が新しい会員の方が増えないと聞く。障害の方がいなくなったことではないので、若い障害を持った方たちはどうしているかなと思うと心配。今の若い世代の方たちが運動の中心になったときに、当事者性というものが薄くなってしまったら大変だなという危惧を抱いている。そういった意味でも、支援センターは在援協時代から、やはり我々家族や当事者の気持ちを大事にしてくれて、そこが昔も今も支援センターの一步も変わらないところだというように私は思っている。そういった意味でも、この当事者性というものがもっと活発になるような支援センターの体制にしていだけたらと思う。

(室津委員)

私自身、組織一体化の話があったとき、反対をしたメンバーの一人だったが、反対をして何とかなる話ではないとわかってきたので、在援協の内実を市社協の中でどう活かしていければ、組織自体が、在援協が市社協になっても、その内容を残していくためにどうするのかをずっと考えてやってきたつもり。その中で、やっぱり在援協と市社協で一番違うと思ったのは、職員の育て方の仕組み。在援協は障害者のことを専門にやっていたので、その職員が昔のこともずっと知っている専門職として異動せずずっと障害者にかかわり続ける。市社協はゼネラリストを目指しているのかもしれないが、多部署を経験することで人を育てるという方法をとっている。どっちが優れているという議論をするつもりはないが、少なくとも、私たちがずっと求めていた在援協を残したいという思いの一つは、そういう在援協がやってきた、長い時間をかけてつくっていく在援協の職員と私たちの関係を継続してほしいという思いが一番あった。その思いは今も残っている。人の育て方の違いや全てが市社協のやり方に支援センターがなっていくとすれば、私たちが求めてきたものとは違っている。市社協の中で市社協の従来のやり方をやる部署と、それから在援協のやり方を継続する部署があっがいいのではないかと思う。時間の経過の中でだんだん薄れているような気がしており、私たちがなぜ市社協との統合に反対をしたのか、最終的になぜそれを認めたのかというところに立ち戻るといのは、常に必要なのかというふうと思う。

(茨木委員)

私が委員に就任した時期は既に一体化された後だが、とても危うい中で、この支援センターの話合いにかかわってきた。一体化するということは、小さなものが大きなものに吸収されていくことが世の常だが、全体的に日本の社会福祉の今の状況を見ると、先ほどゼネラリストという言い方をされたが、社会福祉の仕事全般が、今すごくゼネラリスト化、何でもできる、児童から高齢まで全般を受けられる人を育てるべきだという議論になっている。それがインテグレーションだとかインクルーシブだという言い方を国はしているわけだが、地域の側から見ると一瞬はそうかなって思う。人口が減少化する中で、児童だけ障害だけということでは成り立たない地域も出てきているのはそうだと思うが、障害ということは、全ライフサイクルにかかわって大事なことだと思っている。支援センターとか在援協で私はすごく大事だと思っているのは、国がすごく縦割りで、障害毎に法律化したり、親の会活動もそうになってきたところが、横浜だけはそうではなく地域で異なる障害の方たちが、親御さんの会にしても統合して地域で何が必要かというのを検討してきた。その歴史はすごく大事だと思う。また、入所施設ではなくて、地域で働く場所とか住まう場所、グループホームも独自につくってきたという歴史も、とっても大事だと思っている。今は自立生活アシスタント事業というのが、全国的にすごく注目されているが、そういう事業だけを取り上げるのではなく、そのものがなぜできてきたかを、歴史的に考えて見たときに、ずっと在援協のスタッフたちが親の会の人たちのニーズを酌んで、国の制度ではなくて独自に開発した事業だと思っている。そういうものをつくり出してきて、それを横浜市が制度化してきたが、国の制度になると、地活でも何でも国の事業に組み込まれてしまって、独自性が失われていく。だからこそ、開拓性とか当事者性というのをしっかり持った支援センターにしなければと思うし、それを担うのは職員だと思う。ゼネラリストばかりでは支援センターの価値がなくなるし、第2行政みたいな支援センターになったら意味がないと思う。民間のコーディネート機能としての役割を社協の中でしっかりと持つためには、ぜひ組織の中で専門職を置くということの意義をより強調していきたいと思っている。

(長谷山委員)

横浜にしかないというのは訓練会や後見的支援制度もそう。そういう意味では、在援協から積み重ねてきたものが、今花開いている。訓練会の場合は、本当に会員が減少している。障害児が減っているのかというとそうではなく、今は色々なサービスを受けられるが、障害だとわかったときの親の気持ちは同じなのに、サービスだけはたくさんあるが、その思いは全然解決されていない。どこで私たちがその辺を乗り越えてきたのかと思うと、やはり訓練会で人に出会えたということ。それはドクターなどの専門職がいたからとか、いろいろなサービスが受けられたからとかではなく、やはり訓練会の中で、人と出会ったこと。でも今は、訓練会に入らない人たちがいる。でも入らなくても、そこを支えてくれる人が必ずいなければならないので、支援センターが担ってくれればと思っている。この中に「当事者のグループをつくり」の記載があった。当事者たちは、本当に重度から軽度の人たちまでたくさんいる中で、社会に出始めたりすると、本人たちがどこで何を話したらいいのかわからない、いろんな思いがあるが話す場所がないということを感じる。後見によって、サポーターたちとお話することで随分変わってきたが、仲間たちと話せる場所がないというなかで、そういう場所をつくる

ということも必要。本人たちが力をつけていき、暮らしやすくするためには社会を変えなくてはいけない。社会を変えるには、本人たちが、声を上げていくことが一番大切に思う。

(谷口委員長)

最近、日本の社会福祉の中で乗り越えられていないのが家族主義だと思っている。相撲取りが30歳で初優勝したときに、お母さんをクローズアップしている。芸能人で強姦するとその親が一生懸命お詫びしている。本人が正面に出てきて、なぜその責めを負っていかないのかと思う。こういう社会が、障害のある人のことを親ぐるみで考えていて、本人を正面に押し立てて考えていないという。これはとても大きな家族主義の欠陥で、日本の福祉制度で大失敗し続けている大きな問題ではないかと思っている。その一方で、渋谷さんや松島さんが言っていたように横田さんや内田さんが生きていたころの迫力と元気があるのかと。僕は戦略として、エンパワーメントされていくパートナーとして、テレビと新聞をもっと使えませんかと言いたい。逆に言うと、新聞社やテレビが皆さんのことを主人公に押し立てて、例えば日経新聞の「私の履歴書」というのは経済界の有名人の履歴書ばかりを書いているのだが、神奈川新聞社は、障害者の「私の履歴書」を次々書いていくとか。最初に言ったのは、当事者の市民権を確保することに失敗している。その前に申し上げたのは、家族主義で来て、ごたごたになってきたことで失敗してきたと。そういうことを言いたい。

(森センター長)

きょうのこの後の議論は、実はぜひとも皆様の意見を聞きたいところだったのですが、先ほどお話ししたようにきょうの議論で終わるつもりはない。次回の切り口のまとめ方をまた考えて、皆さんに議論していただく機会を持っていただきたいと思います。

## (2) 津久井やまゆり園の事件について

(谷口委員長)

関連するところも大いにあると思うので、よろしくお願ひしたい。その上で、またご意見を。

(村岡事務室長)

津久井やまゆり園の事件のことについて、起きた事柄が余りに衝撃的で、含んでいるものが大変重いということで、一言、二言では言えないようなお気持ちではないかと思う。ただ一方で、この事件が、一人ひとりの人の尊厳であるとか、あるいは障害のある人に対する社会のまなざしといった、これまで日本社会が、ある意味で曖昧にしてきたこと、あるいは生産性とか効率性とか、そういうのを社会の唯一の物差しとするような価値観であるとか、あるいは優生思想的な考え方とか。あるいは差別の問題というのは、サービスとか施策が充実してくると必ず反動があり、もろもろのことが出てきた。そういう意味では、私どもにとっては避けられないものを最悪の形で突きつけたようなことではないかというふうに思っている。支援センターでは、9月に発行いたしました「お元気ですか」の中で、哀悼とお見舞いの言葉は載せたが、センター長としましても、支援センターとしてあるいは市社協として、何らかの発信をしていく必要があるというふうに考えている。ただ早急にというよりは、

皆さんのご意見をお聞きしながら、また事件のいろいろな背景などが解明されてくる中で、整理して発信ができればというふうに考えており、本日はそうしたことを念頭に、皆様のいろいろなご意見を聞きたいと思っている。

(谷口委員長)

この件について、少しまた意見を言っていたきたいと思う。

(渋谷委員)

横田さんが、40年前に『障害者殺しの思想』という本を書き、去年復刊された。やはりこれは、根底に優生思想があるのだろうと思うが、実は、この社会に住む多くの人が持っている認識だと思う。現に去年に発表された、血液検査による障害診断の結果、最終的に陽性だという結果が出た親御さんは、94%以上が中絶することを選んでいてという現実があり、決して彼が特別な認識を持っているわけではなくて、社会のニーズが、たまたま不幸な形であらわれてしまったということだと思う。マスメディアでこういう観点から取り上げたところは、知っている限りではほとんどない。大きな問題だし、極めて恐ろしかったと思っている。

(下山委員)

長男は重症の障害があり、ここの津久井やまゆり園にうちの息子がいたら、多分殺される対象になっていたのだろうと思う。というのは、声をかけて答えなかった人に危害を加えたというふうに事件のことが言われているので。今まで私は障害のある人への差別というのは、障害のある人への無知や無理解から来るものだというふうに思っていたが、犯人はそこで働いていた経験があり、障害のある人たちともずっと接触した経験を持っている。重症の人たちの支援をしているという立場の中で、その人たちが懸命に生きていることだとか、それから家族もその人を懸命に支えているという状況が彼には見えなかったのかというのが、とても理解ができないところだと感じた。確かに家族も疲れ、支援者も疲れているというようなことが言われていて、それでも懸命に本人を支えている。一人ひとりの懸命に生きている、言葉を発せなくてもいろいろと感じたり、その人なりに日々を過ごしているその様子を、どうして感じ取れなかったのか。そこが本当にわからないところで、最悪の極端な状態でこの事件というのが起きてしまったのだと思う。やはり一人ひとりの命の尊厳というところを、本当に改めて考える機会になった。

(谷口(実)委員)

この事件については、特殊な人が特殊なことを起こしたということではなく、そういう空気というのが社会の中にできつつあったのかと感じている。安保法制から始まって、優生思想では、この間、JDの代表もやっているきょうされんの藤井(克徳)さんが、ドイツに行って、ヒトラーやホロコーストのところでNHKでも発表していた。振り返ると、石原元都知事の障害の重い方たちは何のために生きているんだろうという発言があったり、日本の差別については悪いところ、残念なところがいっぱいあると思う。そういうヘイトの部分とか、女性の問題とか、弱いところに本当にすぐに行きや

すい。そういう中でこの事件の後、障害のある方の人権を守る、暮らしを守るいろいろなところで、本当に頑張ろうとしていこうと思いながらも、そういうところが違う形で社会の中に出てくる。植松容疑者が、職員の目が死んでいると言っており、印象に残っているが、だから、重い方の、人権を守るとかそういうことではなくて、大変な思いをしているのだから楽をさせてあげるといふ言いは変だが、そういったところが出てくる。支援する人たちが大変だから、逆にまた山の中の施設とか、閉じ込めようとする。私たちが地域とか、やっっていくというのと違う流れや、やはり守るために開かれた施設をつくろうとしても、やはりまた閉じなければいけない。そういうところで逆行していく。そういう中で、どう私たちがかわる地域の方々、周りにより理解してもらって一緒にやっっていくのかというところでは、より大変になっていくのだろうと感じる。

(永田委員)

津久井やまゆり園の事件についてですけど、私を感じたことを職員に書いてもらった。(資料配布)別紙配布資料に基づき説明。

私はこの事件を読んで、自分だったら寝ていたら逃げることができないだろうと思うし、これからまた同じところに施設を建てると言っているが、やはり一人一人の思いもあるだろうし、その一人一人の声を聞いて、グループホームで暮らしたいと思う人たちは、街の中でグループホームに入れるといいなと思っている。

(茨木委員)

この間、ピープルファースト横浜という大会があり、あそこに知的の当事者の人たちが書いた文章があつて、それが、永田さんの発言ここに書いてあつたことと同じことが書かれていて、やはり地域で一人ひとりが名前を持って暮らしているということがすごく大事だと感じる。だから自分たちはそれを進めていきたいということが書いてあり、きょうのお話がすごく重なっていて、すごく私は同じ気持ち。

(室津委員)

再建にあたって県は、親の会の意見と法人の意見を聞いて、建てかえることを決めた。一番大切な本人の意見を全く聞いていない。神奈川県が目指した意思決定支援が、本人抜きに全て決まっているということに関して、私たちは意見を出さなければいけない。本人抜きで決めるなということと、なぜ障害の重い人たちだけがここにいたのかということに関して、私たちが今までやってきたことをもう一度振り返らなければいけない。障害の軽い人は地域で支援するが、障害の重い人は、地域では難しいので施設にということをとめられなかった。私たちが言ってきたことは、全ての障害者が地域で普通に暮らすということを目指してきたが、障害の重い人はやはり施設にいるということをやむを得ないことというふうに考えてきたことに関して、私たち自身の運動も考え直さなければいけない。今回亡くなった19人のうち6人は、横浜市から入所しており、横浜市で支え切れずに津久井やまゆりに行った人が何十人かいると思う。横浜の地域で暮らすことを望んでいる人のため、横浜市で活動している私たちがそれに取り組んでいくということは必要なこと。目の前にいない多くの入所施設にいる



人のことの取り組みができてこなかったということ、もう一度考え直す必要があると思っている。

(松島委員)

あの事件を聞いたときに思ったことは、不安があるなと思った。というのは、車椅子で地域とか、電車に乗ると、まだまだ差別が多い。ハード面は政治が作ると思うが、まだ全然追いついていかない。障害者のくせに、あっちにいけ邪魔だ、という意見があると思う。社会の中でまだまだ障害者差別が、残っている。それが、たまたまあんな形で出てきたと思う。今後、僕たちがどうして生きていきたいのかという、社会で大きな福祉はどうしていいの方向性というのが、それをみんなで真剣に考えていかなければいけないと思う。あすは我が身かもしれない。

(谷口委員長)

津久井やまゆり、中井やまゆり、厚木精華園、柿生学園、長沢学園、全部建ったときは人家からはるかに離れたところだった。それで大規模。言いたいことは、我々が歩いてきた歴史というのは、ケア・アウト・オブ・ザ・コミュニティ、コミュニティの外でケアするというのをずっとやり続けて、その流れが今も続いている。改めて入居型の施設の総点検をしないといけないのではないか。支援センターは、グループホームや作業所は密室性が高いというのでモニター活動をしているが、我々は障害のある人たちの暮らしの一つずつについてモニタリングをする必要があるのではないかとつくづく思われる。七沢学園も同じ。建物も暮らしも古い。

(大塚委員)

七沢学園は改装の途中。新館が少しずつできているが、規模が非常に小さくなる。運営委員会みたいなのがあり参加しているが、これは小さいからやめてくれとは私どもは言えないが、少しでもよい方向に行くように努力している。更生ホームは完成しました。

(増田委員)

やまゆり園の建て直しには5年間ぐらいかかるようだが、その間は他施設に転居されるというようなことのようなのだが、一人ひとりの話を聞く時間があるのかと思う。他の施設に行ったら、環境が変わりこちらでもいいとか。グループホームについて、そういうような生活もあるという情報提供をすることによって、グループホームを選択する人が出てくると思うが、そのことの話をする時間があるのかと思う。当事者の、少し時間をおいた後の要望を聞き取るということも必要かと思う。神奈川新聞が紙面でどうのこうのというような指摘もあったが、神奈川新聞も民族差別だという意見があり、それに抗して、紙面で見解を述べていて、偏見に満ちているというクレームもあるが、偏見だと言っていることが、偏見のもとだとやり返す立場にある。グループホームなど、受け入れる側の、共生社会といいながらも、身近でもっと理解をしなければ、何か価値観がそこで遮断されているようなところの壁を取り除くとか、何かそのバリアとか、やまゆり園の問題にしても、共通した問題であると思う。いろいろな当事者のお話が聞ける時間・場所・機会をつくり、それに伴う環境を提供していくと。グループホームが受け入れとしてあったとしても、それを受け入れない地域がまた生

まれているという現実があり、そういうのも、また次の段階の問題点として現実的にあるとの認識を改めてもっていく必要がある。

(森センター長)

この話題を、皆さんで検討・議論していただきたかったのは、障害者支援センターと名乗っている我々が、こういう事件が起こったときに、何かを言っていかなければいけないという気持ちが起こるからだが、どのようなメッセージを出すべきなのかわからなく、皆さんはどうお考えなのかを伺ってみたくて、このテーマをお願いした次第。先ほどの初めのテーマもそうだが、このことも今回1回で終えないで、これも引き継いでいきたいと思っている。

(谷口委員長)

津久井やまゆりのことについて、社会福祉協議会の理事会で話があったと聞いた。素晴らしいと思っており、例えば、きょう室津さんから話があった、かつての神奈川県立の施設、横浜市外の施設に一体どのくらいの人が入っているのか、横浜としてはどう考えるのかをもう一回話題にさせていただいたら素晴らしいと思う。議題2はこれで終了する。

## 2 その他

(小野課長)

「ユニバーサルライブ」のチラシについて紹介。

(江本課長)

本日の議論の中でも、障害のある方のことを地域の中でもっと知っていただくことの必要性などもお話をいただいたかと思うが、来年度は地域の皆さんのところに出向き、障害者の方ご自身が障害のことを理解していただくためのお話をさせていただく、啓発の取り組みを新規事業として考えている。特に地域活動をしている方とか一般市民の方に向けての小地域単位・区域の範囲での講座など、取り組みを強めていこうということ。

(小野課長)

次回の運営委員会の日程だが、予定としては、19日もしくは26日を予定している。

(森センター長)

第1議題は、もう少し整理を進めた上でご提案させていただく。第2議題については、支援センターならどうするというような視点も少しいただけたらと思っている。本日はありがとうございました。